

令和4年 6月 3日

帯広高等看護学院

学院長 大瀧 雅文 様

学校関係者評価委員会

委員長 加藤 由美

学校関係者評価委員会報告

令和3年度学校関係者評価について、下記のとおり評価結果を報告します。

記

1 学校関係者評価委員会委員（五十音順 敬称略）

- ① 加藤 由美 北海道社会事業協会 帯広看護専門学校 教務部長
- ② 金元 信子 公益財団法人北海道医療団 帯広西病院 看護部長（第5期卒業生）
- ③ 小野 悦子 帯広厚生病院 看護部長

2 学校関係者評価委員会

- (1) 日時 令和4年5月25日（水）14：00～15：10
- (2) 場所 帯広高等看護学院 1階 会議室

3 学校関係者評価委員会報告

別紙のとおり

以上

別紙

(1) 令和3年度教育の実施報告について

(委員からの質問)

- コロナ禍の中で臨地実習を補うため、学内において代替実習をおこなっているとの説明があったが、学生への指導において何を重点にしているのか

(学院からの回答)

- 観察、アセスメントに終わるのではなく、「ケアの実践」につながるよう学生を支援している。

(委員からの質問)

- 臨地実習の代替措置として学内でどのような技術演習を行ったのか

(学院からの回答)

- 感染拡大に伴い、例年実施している技術試験を中止したり、技術のデモンストレーションを動画配信する等、対応したものもある。体験が少ない分、患者にどう触れるかという基本を重視し、技術の習得に向け学内で補っている状況。

(委員からの意見)

- 臨地体験が少ない影響か、今年4月に入った新人職員については患者の変化に対応ができない、主体性が弱く、受け身の状態になっているところが見受けられる。学生には患者さんの状況に応じて主体性を持って判断できる力を身に付けてほしい。
- コロナ禍の影響で、臨地実習が少ない状況は学生にとって影響が大きい、患者の反応を感じとれるのか心配、行動調整（観察）により技術の提供に繋がれば良いと思う。
- コロナの状況が落ち着いて、臨地実習や講義が平常に戻ることを願っている。
実体験が少なければ、患者の血圧測定も難しい、学生に少しでも医療現場を見せてあげたい。
- 臨地実習が少ないため、学生が現場のイメージができない、見て覚える経験が少ない、患者の反応を見る力がついていない、患者にどう対応してよいかわからないという事が起きている。
学校の対応としては、学生が失敗しても振り返りが大事ではないかと思う。
- コロナ禍では特に学生の様子に教員の目配りが必要、学生同士のコミュニケーション不足になり、メンタル面に影響が出てくるのでメンタルケアが重要。
- スクールカウンセラーに学生のメンタルケアをお願いする方法もある。

(2) 令和3年度自己点検・自己評価結果について

(委員からの質問)

- 全体の項目別の平均点が上がっている中で、Ⅲ教育課程経営の14の項目「教育の専門性を配慮した担当科目・時間数を配分し授業準備時間をとれる体制を整備」が2.5ポイントから2.4ポイントに下がっている、その要因をどう捉えているか伺いたい

(学院からの回答)

- 実習期間中は授業時間を除き、そのほとんどの時間を実習指導に費やし、学生の学習や生活指導に要する時間が多くなっているほか、コロナ禍で、学生の健康観察やリモート授業の対応に時間を要し、授業準備時間の捻出が難しい状況になっている。

(委員からの質問)

- Ⅶ卒業の項目に関連して伺いたい、学校を卒業して、病院に就職してから続かない新人を見かける、卒業した後にその後の状況を卒業した学校に報告するシステムがあればと思うが、そのような仕組みはあるのか

(学院からの回答)

- 本学院にはそのようなシステムはないが、卒業後に学院を訪ねてきて近況を報告してくれる学生はいる。